ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　月日は流れて、葉桜散りゆく、五月最初の日曜日。

　ピチューは鏡の前で、自分の尻尾を見ていた。最近、ちょっと様子がおかしいからだ。見た目はいつもと変わらないが、動かそうとすると、心なしか少し重く感じる。ピチューは気になったが、主人である雅也は自分の言葉が分からないので、結局そのままだ。

「ピチュー、いくぞ！」

　主人の声が玄関から聞こえる。ピチューは部屋を出て、トコトコと雅也の所へと向かった。

　基本的に、雅也も拓馬も良助も、日曜日は修行も休みになる。それでも、雅也はいつもなら二人と一緒にポケモンバトルに興じたり、自主練で一日を潰したりするのだが、今日は散歩をすることにした。ピチューもリオルもフシギダネも、一体どういう風の吹き回しかと思ったものの、当の本人にも、一応は明確な理由がある。ただ、何となくそんな気分になった、というわけではない。

　散歩のコースは、いつも雅也の朝のランニングコースの途中から、少し脇道にそれたところにある川の近くだ。透き通るほど綺麗な水が流れている川で、対岸は森へと続いていて、探せば珍しいポケモンがいっぱい見つかる。だが、普段、雅也はあまりここには来ない。珍しいポケモンが多い故、密猟者が後を絶たないからだ。勿論、毎日修行している雅也からすれば、大抵の密猟者はひと捻りなのだが、稀に中々強いポケモントレーナーもいたりする。実は一度、その中々強いポケモントレーナーにコテンパンにされたことがあり、以来、雅也は田島辰巳から、ここで密猟者に出会った場合、即刻逃げるよう言われている。

　だが、今日は敢えて、その教えを破りに来たのだ。きっかけは、当然あの山でジャックに殺されかけたことである。彼との戦いは、雅也の心の中に、本人でさえよく分からないモヤモヤとした塊を残した。これが何なのかは、多分、もう一度ジャックと戦えば分かるのではないかと、雅也は思っている。

　とはいえ、今すぐ彼と出会っても、到底敵わないことなど雅也には分かりきっているので、更なる高みへとステップアップする第一歩として、この川に来たのだ。以前負けた相手は、明らかにジャックより弱いので、まずは彼に勝とうと、そう思ってやって来たのである。勿論、今日そいつと出会える保証はどこにもないし、あくまでも散歩が第一ではあるのだが。それでも、その負けた相手と似たような実力のポケモントレーナーに勝てれば、それでステップアップは成功したといってもいいはずだと、雅也は考えていた。

　晴れ渡る空の下。幅の広い砂利道を、三匹のポケモンと一緒に暫く歩いていた雅也の目に、ふと、黄色いテントが目に飛び込んできた。テントの大きさからして、一人で寝泊りするのが精一杯といった感じだ。

　よもや、こんな目立つ所にテントを張っている密猟者がいるはずもないということは分かっていたが、それでも雅也は恐る恐る、テントに近づく。

「中に誰かいるのかな？」

　そう思って、自分のパートナーに話しかけた雅也だが、返事がない。おやっと思って振り返ると、いつもなら可愛い鳴き声で返事をしてくれるはずのポケモン達は、遠くで遊んでいた。リオルとフシギダネは、砂利で積み木っぽいことをしている。楽しそうで何よりだと思った雅也だったが、そこにピチューがいないことに気づき、慌てて辺りを見渡した。

「あっ……何してんのっ？　あぶないよ、ピチュー！」

　そして、思わず大声を出す。なんとピチューは、川で泳いでいた。

　いや、泳いでいたとはちょっと違う。ピチューは、サーフィンっぽいことをしていた。てっきり板の上にでも乗っかっているのかと思いきや、ピチューが乗っていたのはオレンジ色の甲羅だ。よく見ると、ゼニガメである。全身水色の体に、甲羅を背負っているのが特徴の、水ポケモンだ。

　何度も必死で叫ぶ雅也だったが、どうやらピチューの耳には届いていない。遊ぶのに夢中なようだ。それならいいかと、雅也が叫ぶのを止めたその時――

「バカ！　あぶねーぞ！」

　突然の怒鳴り声が、テントの奥から聞こえた。相当な大音量だ。雅也達は全員飛び上がったし、流石のピチューの耳にも届いたのか、驚いて足を滑らせ、甲羅の上から水へと落っこちる。慌ててフシギダネが蔓をピチューの方へと伸ばし、ゼニガメも協力して、ピチューは無事に救出された。

　そんなピチューに近づく、キャンプボーイの格好をした男の子。雅也は彼に、見覚えがあった。

「バッカ！　こんなとこで遊んでんじゃねーよ！　怪我したらどーすんだ！」

　顔を憤怒の色で真っ赤に染めたそいつは、キャンプボーイのキャップをかぶり直し、雅也の方を見る。

「てめーもてめーだ！　自分のポケモンから目を――」

　そこで、まっ赤な彼の顔の色が、少し薄らぐ。どうやら、自分の知り合いであることに気がついたようだ。

「あぁん？　てめーは確か……」

「うん。同じクラスの青柳雅也だよ。こんにちは、星川くん」

　ややがっちりとした腕。緑色のキャンプボーイキャップから見える、少し紺色がかった髪の毛。そして、腰についているのは、濃い目の水色を基調とした、網目模様の黒いラインが特徴のボール。これはネットボールだ。

　彼は、同じクラスのである。

「ああ、そういや、入学式の時、教室にテレポートしてきたやつか」

「それは忘れてよ……」

　思い出しそうになる黒歴史を、コホンという咳一つで振り払い、雅也は呟く。太一は、プッと吹き出した。

「当分、忘れられそうにねーな。中々面白かったからよ」

「うぅ……」

「つーか、それよりも、だ。何してんのかは知らねーが、この時間は、あんまり川には近づくなよ。さっきのあいつ、大丈夫か？」

「……うん。大丈夫だと思う。心配してくれてありがとう」

　ちらりとピチューの方を見ると、今はピンピンして、ゼニガメと一緒にはしゃいでいた。

　正直なところ、雅也から見れば、太一が怒鳴らなければピチューは水の中に落ちたりはしなかったと思ったのだが……多分、本人には悪気があった訳ではないのだろう。チンピラみたいな言葉遣いだが、根はいい奴なのではないだろうか。それが分かったので、雅也も「ありがとう」の一言が自然と出た。

「ところで、星川くんは、ここで何をしているの？」

「ん？　ああ、今はキャンプ中だ。俺のテント、よっていくか？」

　こい、とでも言わんばかりに、太一は顎でテントを差して、スタスタとそっちへ行く。雅也も慌てて、太一についていった。